

Jan. 20. 2012

JSEKM (The Japan Society for Electronic Keyboard Music)

News Letter

No.13

日本電子キーボード音楽学会ニュースレター ～日本電子キーボード音楽学会「第7回全国大会」レポート～

目 次

1. ごあいさつ/柳田孝義	2
2. 総会	3
3. 基調講演/郭宗愷 「電子オルガンの芸術楽器・教育楽器としての社会的認知と課題 ～台湾・東海大学の活動を通して～」	3
4. 事例発表 「中国における電子キーボード教育の現状を知る」 事例発表者：王晓蓮（北京現代音楽学院電子オルガン科教授） 王永剛（ハルビン大学芸術・デザイン学院教授） 譚芸民（西安音楽学院電子オルガン科教授） 謝 及（星海音楽学院ポピュラー音楽科科长） 司会：柳田孝義（JSEKM 代表幹事） 阿方 俊（JSEKM 事務局長） アドバイザー：吉田泰輔（JSEKM 幹事） 楊俊坤（広州市現代文化芸術訓練育成学校長） 通訳：永田瑞木（湘南中文学苑通訳） 書記：森松慶子（JSEKM 編集委員）	5
5. 研究発表 Room - 1 西岡奈津子 宮本賢二郎 司会：森下絹代/書記：柴田薫	9
Room - 2 薛慶 小林恭子 司会：小倉隆一郎/書記：赤津裕子	10
Room - 3 金銅英二 松本裕樹 司会：脇山純/書記：西山淑子	11
6. 研究コンサート 電子キーボードによる ハイブリッド・オーケストラ・・・報告：阿方 俊	13
7. 事務局から 1 学会誌「電子キーボード音楽研究」原稿募集 2 学会メール情報 3 会員情報募集! 編集後記	16

日本電子キーボード学会 事務局

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生 1-11-1 昭和音楽大学内 阿方 or 生頼気付

Tel : 044-953-1121 Fax : 044-953-1311

H.P. : <http://jsekm.jp/> E-mail : jsekm@view.ocn.ne.jp

第7回全国大会レポート

2011年11月12日、第7回全国大会が東京学芸大学において次のスケジュールで開催されました。

10:30	あいさつ 筒井 賢昭 (会場校) 柳田 孝義 (学会代表)
10:45	基調講演 「電子オルガンの芸術・教育楽器としての社会認知」 郭宗愷
11:45	総会
12:00	昼食
13:00	事例発表「中国における電子キーボード教育の現状を知る」 王晓蓮 (北京) 王永剛 (ハルピン) 譚芸民 (西安) 謝及 (広州)
15:00	研究発表 Room - 1 西岡奈津子 宮本賢二郎 Room - 2 薛慶 小林恭子 Room - 3 金銅英二 松本裕樹
17:00	研究コンサート 電子キーボードによるハイブリッド・オーケストラ
18:00	懇親会

以下、レポートです。

ごあいさつ

柳田 孝義 (日本電子キーボード学会代表幹事)

今回第7回目の大会になりますが、昨年の全国大会までは日本電子キーボード学会として開催し、音楽の学会であることを明確にしようということで名称を改正致しました。このたびは、日本電子キーボード音楽学会と称する第1回目の大会となり、英語の略称も JSEKM と改まりました。

ホームページもリニューアルされ、一部ですが英語と中国語の紹介も掲載されております。日本電子キーボード音楽学会の目指すものは、日本の電子キーボードに関する音楽や教育のみならず、いろいろな国の電子キーボード教育や音楽についての情報を交換し、新たな研究に生かすことも含まれます。そのためにもホームページに諸外国の情報等も掲載し、活用して頂きたいと思っております。

昨年の全国大会ではオーストリアのウィーンからおみえになったシュテファン・メラー先生に基調講演をお願いし、本日は台湾からご夫妻でおみえの郭宗愷先生にご講演頂きます。先生はアメリカで学位を取られ、本日も立派な英文のレジュメを出して下さっています。昨年に続いて本年も海外の先生に基調講演をして頂けるのも非常に意義深いことです。また、阿方先生のご尽力で今回中国から20名を越える先生方において頂きました。午後のセッションでは中国の電子キーボードにまつわる音楽事情なども伺えます。私たちが初めて聞く内容が殆どかと思っております。こうしたことを通じて、今後学会の活動を拓けて行くステップとなる、意味のある1日となることを期待しております。

日本の音楽大学や音楽科を設置している教育系の学部では電子キーボードに関してまだまだ保守的です。しかし、下世話な表現ですが、巷では電子キーボードなくしては音楽ができない状況になっております。音楽に携わる研究者、教育者、そして演奏家が無関心で良い筈はありません。大学の関係者にも、こういう学会があり、いろいろな情報が蓄積されているということを知って頂きたいと痛感致します。今日を一つのきっかけとし、来年、再来年の新たな動きにつながって行くよう祈念するものです。本大会開催の為にご尽力下さった先生方、開催校である学芸大学の皆様には厚く御礼申し上げます。



第7回総会

総会は、以下の議案について審議され、問題なく終了しました。

- 報告事項：(1) 平成22年度決算報告
(2) 平成22年度並びに23年度10月末までの会計・監査報告
(3) 平成23年度予算書及び23年度中間会計報告
(4) 2010年11月～2012年10月活動報告
- その他：(1) 第8全国大会開催候補地について、大会当日時点で未定
(2) 会員の増加に関し、ホームページ等を通して意見やアイデアを募りたい

報告事項(1)に関して総会時、遠藤会員から平成22年度決算報告に関する次の内容の質問がありました。質問主旨は、平成22年度の収入と経費の内訳の説明で収支が40,695円になっているが、繰越金内訳にこの「収支の40,695円」が繰越金内訳に明記されていないがどうなっているのか、というものでした。この金額は期首残高の剰余金643,608円に40,695円がプラスされた金額が、繰越金内訳剰余金684,303円となっています。繰越金内訳の剰余金にこの金額が含まれていますのでご了承ください。

期首残高		収支		
科目	金額	前受金取崩額	期中前受額	期末前受額
剰余金	643,608			
前受金	125,000	-30,000	0	95,000
残高	768,608			

繰越金内訳		資産内訳(期末)	
科目	金額	銀行預金	772,462
剰余金	684,303	郵便振替残高	15,200
前受金	95,000	現金	16,643
残高	779,303	計	804,305

平成22年度決算報告書抜粋

基調講演要旨

電子オルガンの芸術楽器・教育楽器としての社会的認知と課題
～台湾・東海大学の活動を通して～

郭宗愷／東海大学教授

通訳：永田瑞木／湘南中文学苑

私は本来ピアノの専攻で、アメリカでピアノの博士号を取得したが、小さい頃からヴァイオリンやリコーダーも習っていた。1965年、高校の頃父が電子オルガンを買ってくれたのをきっかけに練習を始めた。その後アメリカから帰国して学生を教えるようになり、学生にピアノ協奏曲を演奏させたが、1991年に初めて電子オルガンをオーケストラの代わりに用いてピアノ協奏曲を演奏した。1992年にヤマハのエレクトーンEL90が出て本格的に協奏曲のオーケストラパートに電子オルガンを使い始めた。92年は2台の電子オルガンと1台の電子ピアノで行ったが、その後発展し、現在では電子オルガン8～10台でオーケストラパートを演奏している。



この演奏形態を経験した当時の学生達の一人は後にアメリカで博士号を取得し、現在は瀋陽の音楽院で教えている。

元来台湾では電子オルガンは冠婚葬祭、お寺の縁日やお祭りで使われる楽器だった。1970年代以降、トラックの上にステージをしつらえて電子オルガンを演奏し、横で若い女性が歌ったり踊ったりという場面が至る所で見られ、また、女性達の衣装が非常に涼し気なものだったこともあり、一般的な台湾社会の人々の電子オルガンに対する印象は、あまり良いものではなかった。また、電子オルガンについてはヤマハが殆どの教育を行っており、台湾の大学や小中学校等の正当な音楽の学校教育には受け入れられていなかった。そのため、私が電子オルガンに身を投じた当初は多くの人に反対された。

日本の文科省にあたる台湾の教育部で、台湾の大学で電子オルガンを教えるにあたって必要な資格(修士以上)に合致する人物が台湾にはいなかった。私が電子オルガンの分野に進んだ当初の目的は、大学で電子オルガンを教えられる人材を育てることだった。東海大学で電子オルガンの履修科目を開講し、学生がソロとアンサンブルを学べるようにしたが、初期は大変困難だった。東海音楽大学音楽科教授は半分以上がアメリカ人とロシア人であるが、ピアノ専攻の学生が電子オルガンを選択履修したところ、彼女のアメリカ人のピアノの先生がすぐにやめるように言った。その後不断的な努力を続け、我々の成果が評価され、今は当初反対していた先生がたも電子オルガンを東海大学の一つの特色と認めてくれている。

東海音楽大学では電子オルガンが、ピアノ協奏曲の他にオペラ公演でもよく用られ、学内だけでなく、学生による学外の演奏や、卒業生の演奏会でも電子オルガンが使われる他、教授と学生が電子オルガンの入った編成と一緒に演奏することもしばしばある。また、外部から来学する著名な音楽家と電子オルガンの学生による共演もおこなわれ始めた。電子オルガンは大変使い勝手の良い楽器だからである。大学院にも電子オルガン専攻を設立、優秀な学生が育ており、学部時代からコンクールで賞を獲得、大学院生の時、日本で行われたエレクトーンコンクールインターナショナル大会で第3位になった者も現れた。

東海大学付属小学校では20人程の小学生がシングルキーボードによるオーケストラを編成していたことがある。スコアを見ながらの演奏で、各児童が1パートずつ受け持つ。ピアノコンチェルトにも取り組む中で、ピアニストとして一人一人がステージに登るということにも意味がある。このオーケストラは成績優秀で、コンクールでも良い成績を上げていた。

このような実践を積み重ねて、台湾でもだんだん電子オルガンに対する印象が変わってきた。私たちは電子オルガンで演奏するにあたって、音色とスタイルの面に力を入れている。クラシックの先生方は何よりもスタイルを重視するので、電子オルガンの学生がそれぞれの音楽のスタイルを正確に表現すれば、クラシックの先生に演奏を認めてもらえ、携わっている私たちの地位も認められる。



電子オルガンという楽器は非常に使いやすい楽器だ。オーケストラや、編成の不足部分を少人数でも補うことができる。科学技術とともに発展し、最も前途洋々たる将来性のある楽器が電子オルガンである。鍵盤を使ってあらゆる楽器の音、オーケストラの音まで引き出せるのは大変幸福なことだ。バッハもベートーヴェンもリストもどれほどそれを夢みたことか。電子オルガンは努力していく価値がある楽器だし、社会的に意義のある楽器だと考える。

ご清聴有り難うございました。

(文責 森松慶子)

事例発表

中国における電子キーボード教育の現状を知る

事例発表者：王晓蓮（北京現代音楽学院電子オルガン科教授）

王永剛（ハルビン大学芸術・デザイン学院教授）

譚芸民（西安音楽学院電子オルガン科教授）

謝 及（星海音楽学院ポピュラー音楽科科长）

司 会：柳田孝義（JSEKM 代表幹事） 阿方 俊（JSEKM 事務局長）

アドバイザー：吉田泰輔（JSEKM 幹事） 楊俊坤（広州市現代文化芸術訓練育成学校長）

通 訳：永田瑞木（湘南中文学苑通訳）

書 記：森松慶子（JSEKM 編集委員）

今年度は中国の各地から電子キーボード関係の先生方が大会に参加するのを機に、例年、パネルディスカッションを行っていた時間帯を「中国の電子キーボード教育の現状を知る」というテーマで事例発表を行った。柳田孝義代表幹事のあいさつの後、4名の方が以下の発表をした。続いて、中国と台湾からの出席者による自己紹介とワンコメントの後、アドバイザーのまとめの言葉で終わった。発表はパワーポイントや多くの資料が用いられ、発表者の意気込みが伝わってくるものであった。

①王晓蓮

中国では 1985 年にヤマハが北京、天津、上海に電子オルガン講師養成コースを設置した。私自身は 1984 年に上海、香港で電子オルガンを学んだ先生の演奏を聞く機会があり、電子オルガンに心惹かれた。中国でも初期の頃、電子オルガンは正当な楽器と見なされておらず、多くの親が子供に、電子オルガン等せずにちゃんとピアノを弾きなさい、と言いつけ、専門の電子オルガンの先生もいなかった。ピアノやアコーディオン、その他の楽器の教師が電子オルガンも教えていた。しかし長年の努力の末、最初に 3 箇所で行った電子オルガン講師養成コースは、今では多くの音楽院に設けられ、高く評価されている。1995 年には中国で最初の電子オルガン学会が設立された。主な仕事は講師の養成であった。中国の各省に電子オルガン講師養成コースが設置された。学会のもう一つの大きな仕事は、コンクールの実施である。ヤマハと共同でコンクールを開催しており、カシオとも共同で電子キーボードコンクールを開いている。中国の特徴は、シングルキーボードを学ぶ人が多いことだ。そうしたことも踏まえて、中国の電子オルガン学会は昨年中国電子キーボード学会に名前を変更した。これによって、シングルキーボード、3 段鍵盤の電子オルガン、電子ピアノを含め、総合的に発展を図る構造ができた。中国でも午前中伺った台湾の事情と同様、電子キーボードが評価されなかったところからスタートし、大変な努力を費やしてきた。子ども達がより電子キーボードを習い、音楽に親しみと理解を深めて行けるよう今後も努力を続けたい。日本の先生方をお呼びして教えて頂く機会も設けており、大変貢献して頂いている。今後電子オルガンが益々多くの人に好かれ、認められることを信じて努力を重ねて行きたい。



②王永剛

ハルビンに初めて 3 段鍵盤の電子オルガンが入ったのは 1981 年。市の朝鮮民族芸術館にヤマハのエレクトーン C-200 が入ったことが黒竜江省の電子オルガンの歴史の幕開けだった。1986 年にハルビン師範大学芸術学院音楽科が高等師範としては初めてヤマハエレクトーンを導入。当時は専門の演奏家も指導教材も不足していたので発展することができず、1997 年に黒竜江省音楽家協会が第 1 回ヤマハ音楽教室指導者養成コースに音楽指導者数名を参加させた時からようやく充実した歴史が始まった。私自身は大学では音楽を専攻し、1997 年に北京で電子オルガンを学習した。

最初の時期にヤマハの電子オルガン国際演奏グレード5級と指導資格を研修で得たのは黒竜江省で5名。それぞれの音楽院で講師養成コースがあったがこの合格者達は、正規の授業時間以外のプライベートな時間を割いて資格取得の為に勉強に充てた。黒竜江省の電子オルガン指導研究センターは1997年に設立され、センターと教室とで現在25箇所開設されている。養成訓練を受けた講師は120人程。黒竜江省での電子オルガン学習者人口は1300人程。レッスンの主な内容は楽器の扱いに習熟すること、国際演奏グレード5級取得のためのレッスン、電子オルガンの教授法等、6分野に分かれている。センターでは電子オルガン専用教材の出版物やCD、DVDを出しており、教材は中国の文部省や出版社が優秀な出版物を選ぶコンペで2等賞を受賞した。

黒竜江省の電子オルガン普及の特色は、小学校に進出していることだ。ハルビン市では10あまりの小学校で電子オルガンの無料レッスンを行っている。私のところの学生の一人は、大体週1回1時間で8名の児童を教えている。この無料のレッスンによって子ども達を電子キーボードにより惹き付ける状況ができてきている。ハルビン小学校はハルビンの電子キーボードを用いた音楽教育の中心で、小学校の中に音楽コースがあり、全国各地から130人の音楽教師を招いている。

30年前に中国の教育部がシングルキーボードを中国の音楽教育にとり入れることを決めたが、私の夢は、3段鍵盤の電子オルガンを正規の音楽教育にもっと大規模に導入していくことである。中国では芸術教育を重視している小学校の多くで9月に芸術祭が行われ、民俗楽器とシングルキーボード、電子オルガンによる演奏等もある。

黒竜江省の電子オルガン指導研究センターは国家重点大学や各地の音楽院、高等音楽学校や音楽師範学校に優秀な人材を送り込んでいる。中国の資格試験、ヤマハの国際グレード試験を実施し、2001年からは「新芸杯 (New Art Cup)」と名付けたコンクールも開催している。コンクールでは講座や音楽学院のコンサート等も開かれ、全国各地から電子オルガンを学ぶ学生が参加し、ソロ以外に重奏、協奏曲、伴奏にも取り組んだ。このソロ以外への取り組みは、中国の電子オルガンの歴史では初めてのことであった。新芸杯というコンクール活動はハルビン市内の繁華街でも演奏が披露され、多くの市民が電子オルガンを身近に接する機会となっている。毎年200程の活動件数があり、3,000人余りが演奏に参加。20万人以上の観衆が演奏を聴いた。また、APEKA (アジア太平洋電子キーボード協会) も昨年ハルビンでコンクールを実施した。



黒竜江省の電子オルガン指導研究センターでは、日常のレッスン、トレーニング、講師が演奏表現する環境を提供している。こちらで生まれた作品がヤマハの教材として採用されている例もある。黒竜江省における電子オルガンの発展は、講師の質向上にかかっていると認識している。今後も講師の養成活動が要であり、教材についても研究が必要である。現在中国で電子オルガン養成科を受講して指導に当たる人数はこの5年間で増えており、国際指導者試験の受験生も増えている。また、電子オルガンの売れ行きもこの5年間で同じく増えており、今後益々発展すると確信している。

③譚芸民

西安音楽院のある西安は、13の王朝が首都を構えたところで、日本の奈良や京都にも似ている。かつて阿倍仲麻呂も留学していた。西安音楽学院の学院長は中国音楽家協会の理事長でもあり、多くの音楽映像作品を作っている。日本でも教鞭をとっていた著名な先生も所属しており、ご縁が深い。

私は5歳でアコーディオンを始め、12歳から西安音楽院附属中学で電子アコーディオンを習い87年に学校に残って教え始めた。90年にFX-20でエレクトーンを学びだし、ヤマハの国際演奏グレード5級を取得後、西北地区における講師養成の仕事をするようになった。私が西北地区から各地に送り出したエレクトーン講師は1,000人程になり、専門コースの大学生も100人程指導した。ヤマハ音楽教室で子供の指導もしている。非常に多くの子ども達がキーボードを学んでいる。

西安音楽院では2001年に電子オルガン専攻が設置され、10年の歴史がある。短い期間ながら大変豊かな実績を上げている。現在付属中学高校、大学、大学院合わせて50人程の学生がいる。西安音楽院は一貫した専門教育のカリキュラムができており、専攻でエレクトーンを学んでいる生徒は成績も優秀である。西安音楽院の講師養成センターでは、子供のレッスンから指導者の研修まで行っている。ここ数年は山西省にも進出し、電子オルガンによる小学校から中学高校、大学での授業と、指導者の養成を幅広く展開し、各方面に向けてのより広範な普及を図っている。民俗楽器と電子オルガンの共演は、著名な音楽家の先生がたから大変高い評価を頂いた。

私は西安音楽院で電子オルガン専攻の他に、アコーディオン専攻にも従事している。幼い頃からアコーディオンを学び、全国規模のアコーディオンコンクールで2等賞になったことがあり、現在はローランドの電子アコーディオン演奏研究にも取り組んでいる。電子アコーディンはMIDIを装備しており、私たちもMIDIを活用した音色等データの変換や共有について学んでいる。新しい楽器なのでまだ努力と研究が必要で、ハード面でも改善の余地がある。ローランドの電子アコーディオンを学んでいる人は増えているがまだそれほど多くはない。電子アコーディオンに関しては電子オルガン程にはまだ研究が進んでいない。ポピュラー向け、クラシック向け、いろんなアコーディオンを研究開発する必要がある。電子オルガンについてはある程度の基礎があるので、各領域に向けていっそう発展させ、あらたな段階へ進めていきたい。



④謝 及

星海音楽学院では、2007年以降専攻科を設けて電子キーボードのソロとアンサンブルを行っている。また、作曲、他の楽器の協奏曲の共演、伴奏等、様々なことも応用分野として取り上げている。MIDIや周波数に関するハードの専門技術に関しても研究している。その他にも電子キーボードの発展についてさまざまな研究を行っている。星海音楽学院では電子キーボード関連の複数の専攻を有している。第一に、鍵盤の技巧が豊富な電子オルガン、次にデジタルピアノ、第3には電子キーボードアンサンブル、そして第4



にシンセサイザーによる音楽制作の科である。また、パソコンを使った音の調整や音作り、さらに、電子オルガンのための教材制作も行っている。学内外での学生の公演を目的とする芸術実践のコース、専門家を招いて既存の作品を電子キーボードの為に編曲する技術を学ぶコースも開設している。星海音楽学院の電子キーボード関連の専攻は、ポピュラー音楽科に属しており、ポピュラー音楽をメインに取り扱っているため、ヴォーカルを扱う必要もあり、学生のニーズに応じている。

星海音楽学院付属高校には電子オルガン専攻コースがあり、大学の本科では電子キーボード専攻とその他の系列の科目も履修できるようになっている。各学科で細かく専攻科目と選択履修科目が用意されており、大学院に進めば器楽の選択履修と電子オルガン専攻の履修ができる。民俗伝統楽器とのコラボレーションもある。

電子キーボードにはまだ発展の余地があり、満足しているわけではない。異種楽器との合奏もさらに進めていきたい。現在電子キーボードは普及教育を進めている段階で、今後は社会のエンタテインメントの分野に進出していきたいと考えている。

事例発表者の他、薛慶（広東外語芸術教員養成大学）、馬曉平（西安音楽学院）、朱静（西安音楽学院）、王茜（四川音楽学院）、郭宗愷（台湾・東海大学）から自己紹介とワンポイントコメントがあった。

まとめ

楊俊坤

中国には各省にそれぞれ独自の電子キーボードの学会があるが、学会どうしの交流や国外の関連団体との交流の機会はこれまで余り無かった。今回こういう場を頂けて大変良かった。私は2010年にアジア太平洋電子キーボード協会(APEKA)を立ち上げ、中国各地で声望のある方をお招きした。そして主席には、他に比類ない実績をお持ちの阿方俊先生をお迎えした。アジア太平洋電子キーボード協会は2011年2月に香港で正式に設立された。既に第1回のフォーラムを実施、コンクールや学習交流活動も行っている。今後アジア太平洋の音楽文化活動の更なる発展の為に力を尽くすことができればと思っている。今日この場にいらっしゃる中国、台湾の先生方とともに今後も活動を進めたく、日本の皆様にもご参加ご協力頂きたい。



吉田泰輔

国立音楽大学に勤めていた折、25年程前に北京、西安、上海の音楽院を訪問したが、当時は電子キーボードについて話題になった記憶が無い。本日、素晴らしい発展を伺って驚いている。いろいろ伺った中から1点だけ申し上げたい。電子キーボードの音楽も芸術である以上、素晴らしい芸術家を養成することが最も重要で、すぐれた人が多く出るためには、それを支える底辺が大きくならなければいけない。その意味で私が一番関心を持っているのは、学校教育、特に初等教育である。先ほど王永剛先生が黒竜江省の小学校の活動を話題にされたが、そういうことが非常に大事だと考えている。音楽教育は国によって、また中国では省によってカリキュラムその他の事情が異なるので一概には言えないが、小学校で音楽を指導する先生が電子キーボードにどのくらい関心を持つかが重要である。日本ではその点がうまくいかず、小学校の普通の音楽教育と電子キーボードが遊離してしまった。これが日本の電子キーボードの発展を妨げた一番大きな要因だったのではないか。恐らく中国の場合も小学校の先生になる方は師範大学、教員養成大学を出た方が主流であろうと思われる。小学校の先生になる方に電子キーボードに興味をもって頂ける活動をして頂き、日本でもそれをお手本とさせて頂ければ、と期待している。



研究発表 Room-1

司会：森下絹代／書記：柴田薫

研究発表① 「韓国オペラ・フェスティバルと電子キーボードの活用」

西岡 奈津子（電子オルガン演奏家）

発表者の西岡女史は、国内外で電子オルガンのオペラ演奏等で活躍されており、韓国とのつながりは2002年に日本で行われた韓国人ピアニストの為のエレクトーン・セミナーでの指導を皮切りに、2006年・2008年韓国テグの室内オペラ・フェスティバルに参加・演奏と継続されている。今回は2011年3～4月に行われた「第13回韓国室内オペラ・フェスティバル」の出演の様子、電子オルガンの活用の実際と展望を発表された。

この催しは、韓国全土の主要オペラ団・7団体が2ヶ月に渡り、ソウル・世宗文化会館において行われる大規模なもので、公演は芸術専門チャンネルで生中継されたり、メイキングがドキュメンタリー番組になったりするほど。

電子オルガン奏者にとっては、リハーサルから本番の場所で行われる恵まれた環境である一方、従来のオーケストラによる公演と同じ稽古スケジュールで行われる厳しさもあったという。演奏されたのは、歴史のある「Korea Chamber Opera」と共演の以下の2演目（計8公演）

G.C.Menotti “Hep,Hep the Globolinks1”

コンピューターミュージック（SE）と電子オルガンの共演形態で電子オルガンのサウンドを活かした。

B.Britten “The Little Sweep”

四手ピアノとの共演形態（弦楽器、打楽器パートを電子オルガンが担当）で、音にリアリティを持たせられた。

紹介されたDVDからは公演の熱気と成功が伝わった。韓国人のラテン的気質や新しい文化に対する偏見のなさ、受け入れの背景にあるとの推察は興味深かった。

コンパクトな室内オペラにおいて、稽古ピアニストのように小回りが効く形態であること、原曲の音像に迫るサウンドを得られることは、電子オルガンならではの利点。

オーケストラの代替でもなく、競うのでもなく、機動性や繊細なアンサンブルが可能な電子オルガンのメリットを活かしていきたいという。

今後の課題として、継続発信することや奏者育成の必要性を挙げられ、韓国でもコレペティのような電子オルガン奏者の養成講座が開かれる予定も検討されているとのこと。こうした継続性、発展性を引き出されたのは、ひとえに彼女の音楽、そして人間性の功績であろう。

研究発表④ 浜松学芸高校におけるハイブリッド・オーケストラの試み

宮本 賢二郎（浜松学芸高校）

浜松学芸高校芸術科の電子音楽課程は日本の高校で唯一、電子オルガンを独立した過程として持っており、中でも近年効果を上げているのが、スコア・リーディングによる音楽表現の授業として行われている「音楽演習」（バロックからロマン派に至る様式感を重視）、そして音楽課程定期演奏会のオペラ上演におけるハイブリッド・オーケストラの実践である。

総合的な学習として、オペラ（古典…モーツァルト《魔笛》《フィガロの結婚》）を上演したが、本格的なオーケストラに近い音響と音楽を再現でき、一度やったら「電子オルガンでなければできない」という空気になった。足りない弦楽器やダブルリードを補える柔軟性のある編成、異なる音楽表現への相互理解などの利点と共に、①電子オルガンの生徒にとっては、表現力の向上、教科連携（音楽史、世界史、海外研修）の強化、②管楽器・弦楽器の生徒にとっては、オーケストラの体験、弦楽器の音程がよくなる、③声楽の生徒は、ピアノ伴奏に比べて声楽表現が豊かになった、というような効果が上がった。

とかく電子音の特性が懸念されるところであるが、「音楽力」と立体的な音像を意図した編曲とパンの振り分け～スピーカーの配置、間接音の利用で、違和感のないサウンドを作り上げることが出来た。

ここで主張したいのは、音楽力を養うことこそが重要ということである。一般的に電子オルガン学習者にはクラシック的な「音楽語法」が欠けている傾向がある。電子オルガンの音が電氣的ということの問題視するのではなく、弾く側の「音楽力」によって音楽を聴かせる…アコースティック楽器の真似ではなく、「生（なま）的な表現」をすることこそが必要となってくる。オーケストラ的な表現を目的とした学習の一方で、電子オルガンをあくまでも「進化したオルガン」として捉えた基礎的な訓練も大事である。音痴ならぬ「旋痴」を矯正すること、限られた音色で表現できうる力を養うこと、これを電子オルガン教育の重要事項として提言していきたいと考えている。

学校教育において電子キーボードは、音質の良さ、扱いやすさ、耐久性、デザイン性のよさ等から活躍の場があり、今後エアーコントロール機能が付加されるとなると一層音楽性が向上すると思われる。同中学では部活で、いろいろな楽器の持ち寄り編成で室内楽の取り組みが行われているが、電子キーボードや電子オルガンが入ることにより、①広いレパートリー ②習熟度の違う生徒が一緒に合奏 ③少ない人数で ④音程の苦勞なく「音楽」に時間を割ける等々が可能になり、吹奏楽に代わる室内楽のスタイルとして期待されている。

以上、アカデミックな分析を基に体系化された実践の効果、提言の数々に、出席者からは多くの感銘と賛辞が寄せられ、浜松学芸スタイルがスタンダードとなる日を予感させる発表であった。

研究発表 Room-2

司会：小倉隆一郎／書記：赤津裕子

研究発表② デジタル技術の活用と音楽能力の育成

—広東外語教員養成学院デジタルピアノグループレッスンの実践—

薛慶（広東外語教員養成学院）

通訳：鄭恵文（東京学芸大学大学院）

発表者薛慶氏は、広東外語教員養成学院の小学校音楽教師を育成する学部で教鞭をとっている。中国ではピアノ教育の目的がこれまでの貴族教育やエリート教育からもっと多くの愛好者を対象とした平民教育や大衆教育へと変化してきた。その社会の要求を受け、新たな教育形式が求められているという。本発表ではその新しい形としてのデジタルピアノ集団授業について、実際に行っている授業を紹介し、学生の音楽能力の育成について述べている。

広東省では小学校での音楽教育がより発展するためには、音楽教師の質を向上させることであるとされ、デジタルピアノ集団授業による効果が期待されている。デジタルピアノ集団授業は、多様な演奏形式や豊富な教育内容が盛り込まれ、学生の演奏技能を効果的に訓練でき、また学生の音楽総合能力を高め、社会に出てからの実用的な人材を育成することができるからである。

小学校音楽教師育成の目標は、キーボードの運用や歌の簡易伴奏などの実践の場に役立つ総合的な能力を持つ人材を育成することと捉えられている。なかでも最も重要な能力の一つとして即興伴奏と即興演奏をあげている。

そしてデジタルピアノ集団授業の構想として次のように考えている。

- ① 集団授業を通して個々の学生の能力を高める
- ② 実用性が高く、学生の興味に合った教材を選択する
- ③ 学生の学習進度に合わせて総合的に音楽資質を高める
- ④ 合わせることにより音楽的な演奏が実現できる合奏を取り入れる

これらを実現するために薛慶氏らはチームを組んでテキストを編纂している。まず、「ピアノグループレッスン教材」（2005年）、「デジタルピアノ基礎教程」（2010年）を編纂し、実験的に使用・改正・補充

を行って、正式に「デジタルピアノグループレッスン教本」(2011年・西南師範大学出版社)を出版した。

ピアノ集団授業では教育内容の多様性を重視し、読譜・楽典・移調などが一体となった総合的な科目としてとらえている。評価のための試験もある一曲を弾くのではなく、その場で移調や変調をするような内容に変わってきているという。つまり実践の場で求められる音楽能力を重視した評価が行われているのである。

研究発表⑤ 教員養成大学におけるMLの現状と課題

小林恭子(目白大学)

発表者は、まずこれまでのご自身の経験から今日の電子ピアノの現状について言及している。また現在小学校教諭をめざす学生を対象に教鞭をとっており、学生の実態を踏まえたML指導の活用について紹介し、さらに現職の小学校教諭を対象にしたアンケートをもとに「現場で役立つ技能の育成」について述べた。

電子ピアノの利便性は①日本の住宅環境に適している②学校現場では正面を見て授業が進められる③調律の必要がない④移動が容易である⑤フロッピーやUSBなどの音響教材の使用が可能である、などにあり、さまざまな場面で電子ピアノ使用の増加が見られるという。

教員養成におけるMLシステムの活用については次のような報告であった。

まず教員養成のための課題作成で気をつけていることとして下記の4点をあげている。

- ①さまざまなレベルの学生にあわせて譜面を用意すること
- ②難易度の高い曲を弾いたことだけで高評価にはしない
- ③いかに現場で使えるようなピアノ(弾き歌い)ができているか
- ④数多くこなして練習をしているかということに注目

そして今後、児童教育学科の特性を留意した教則本を作成したいとの意向である。

またML授業を通しての課題として、初心者の男子学生のピアノへの苦手意識をなくす指導と中途半端に音楽を学習してきた学生の矯正指導をあげている。

現役の小学校教諭を対象にしたML授業についてのアンケートではいくつかの課題が報告された。

MLに関しての課題については、プラス面として「授業内の個人練習に役立っていた」、マイナス面として「せっかくのMLのシステムを駆使して進められていない」があげられていた。授業内容に関しては興味深い結果が報告された。「大学時代の音楽実技内容が現在役立っているか」の問いに対して、役立っている人 34%、役立っていない人 48%という結果が出された。さらにピアノのテキストに関してはバイエルを学んだ人ほど「現場で役立っていない」と回答したとのことである。そして合唱、指揮法、コード伴奏、弾き歌い等の指導の強化が必要であると述べている。

最後に、発表者は総合的にさまざまな音楽知識・技能を幅広く身につけることのできる内容を組み立てることが重要であり、そのためにML教室を活用していきたいと締めくくった。

研究発表 Room-3

司会：脇山順／書記：西山淑子

研究発表③ 楽器の寿命から電子オルガンを考える

金銅英二(松本歯科大学口腔外科解剖学第一講座)

電子楽器の寿命は、アコースティック楽器に比べ、非常に短い。本発表は、その原因と将来的にもっと寿命を延ばす為の方法を考察している。ここでは、電子オルガンに特化し、まず、命をつないだ電子オルガンの3つの事例が報告された。

事例1. ヤマハ・エレクトーンF-1型——1965年10月、お茶の水クリスチャンセンター礼拝堂に設置。

1981年、立川駅前教会礼拝堂に移設。新しいオルガンに入れ替えのため、2008年3月、長野県長谷村のオルガン工房の保管。発表者の仲介で、2010年3月、あがたの森文化会館に設置。現在コンサートに使われている。

事例2. ロジャーズ・オルガン・ロイヤルV型—1974年10月、カーネギーホールに設置。(ヴァージル・フォックスが設計に携わった) 1980年10月、ヴァージル・フォックス没後、ガーデングローブ・クリスタル大聖堂(カリフォルニア)に設置。その後倉庫に眠る。1983年、滋賀県の宗教法人の大聖堂に設置。10年後、フルデジタル化され、再び大聖堂に戻る。

事例3. ハモンドオルガンXB-5—1995年、波田町立小学校に備品として導入。2001年頃から学内の倉庫に保管。デジタル方式で、部品がなく修理不能。足鍵盤を改良し、ベンチは再塗装して、なんとか救えたが、本体は再生できなかった。

各楽器の仕様や特徴メーカーについても詳細に紹介された。

寿命が短くなってしまふ原因として、部品がそのモデルの製造中止と同時に製造中止、保有期間は5～8年のため、修理、交換が不能となってしまう。また直せる技術者がいないなどが上げられる。自分で直そうとすると、「電気用品安全法(PSE)」に抵触することになる。

今後は、メンテナンスや部品供給などに付いても設計段階から考慮する必要があり、また、デジタルからアナログまでに造詣の深い技術者の養成も必要ではなかろうか。そして、法の改正も働きかける必要がある、と結ばれた。発表者のオルガンに対する熱い想いが、『今、ご使用の楽器(ステージア、アトリエ、ドリマトーン)あと何年使えれば、充分と納得できますかあ?』という質問に凝縮されていた。メーカーさんには、早速考えて頂きたいと、切に願いたい。

研究発表⑥ 介護予防における電子キーボードの活用についての考察

～リズムテンポが正確すぎるという批判へのアンチテーゼ～

松本裕樹(和歌山大学教育学部 特任助手)

介護が必要な高齢者を減らそうというプロジェクト『わかやまシニアエクササイズ』(2006年、和歌山県と和歌山大学が、協働で始めた)で、電子キーボードの生演奏を担当している松本裕樹氏が、「電子キーボードのリズムセクションは、リズムテンポが正確すぎて、演奏が機械的で不自然で、違和感がある。」「リズム発音に演奏を制限されていて自由に歌えない。」といった批判に対する、アンチテーゼとして、電子キーボードの優れた点、メリットを現場の声やアンケート結果から論じたものである。

まず、和歌山県の紹介から始まり、和歌山県の場所や人口、特産品などの紹介に続いて、日本と和歌山県の介護を取り巻く状況と『わかやまシニアエクササイズ』が始まった経緯について説明された。

松本氏は、まず利用者にアンケートをとり、好きな音楽ジャンル、曲を答えてもらい、高齢者に馴染みの深い曲を選曲し、運動用に編曲して演奏している。

電子キーボードを使うメリットを5つの視点から上げている。

①運動感覚において。②時間感覚において。③音響感覚において。④楽曲演奏の柔軟性において。⑤可動性において。

まとめると、運動するのに最も大切なテンポキープが正確にでき、運動者にとっては、馴染み深い曲の生演奏のため、気分的に高揚し、時間も短く感じられ、疲労感も少ないという結果が出た。演奏者にとっても1台の楽器で瞬時に操作できるので、柔軟性に富んでいる。また、重量が軽く、セッティングや移動が容易であり、運動者と対面するかたちにセッティングできるので、お互いの距離感もつかみやすいという点でも便利である。

さらに、運動者と事業所スタッフへの調査で、CD.カラオケでのトレーニングと較べたところ、断然電子キーボードの生演奏の方がポイントが高かった。認知症予防にも繋がる。

この研究発表を聴きながら、人と人とのコミュニケーションの大切さを改めて考えさせられた。電子キーボード(電子楽器)がコミュニケーションを円滑にするツールとして、ますますフレキシブルに活用されることを願ってやまない。

研究コンサート
電子キーボードによる ハイブリッド・オーケストラ
リスト“悲愴協奏曲”の比較演奏

報告：阿方 俊

今年度の研究コンサートは、以下のプログラムと演奏者で、一段電子キーボードとアコースティック楽器によるハイブリッド・オーケストラによるものであった。

【プログラム】

ヨハン・セバスティアン・バッハ
小フーガ ト短調 BWV578

セルゲイ・プロコフィエフ：「ロミオとジュリエット」組曲第2番 Op. 64ter より
モンターグュー家とキャピュレット家

ピョートル・チャイコフスキー：組曲「くるみ割人形」Op. 71a より
あし笛の踊り

イゴール・ストラヴィンスキー：バレエ音楽「ペトルーシュカ」より
ロシアの踊り

フランツ・リスト
悲愴協奏曲 ホ短調 S. 258

【演奏者】

ピアノ：ロルフ・ブラッグ（モーツアルテウム音楽大学教授） 中地雅之

演奏指揮：齊藤豊

フルート：菊地美伯 クラリネット：高橋候輔、島沙和 トロンボーン：谷村大樹

パーカッション：岡本有未、原田裕介

電子KB：山本英哲 及川慶太 神野由布樹 鄭恵文 佐々木悠里香 清水麻理恵 白井真里
田島彩也香 中野智恵子 松浦結花 吉田めぐ 吉本奈美 石川尚美 上野はる佳
鈴木晶子 本多志織 向山恵 学部3年 宇野旭 上出美希 菊池理乃 齋木麻美
立川麻由子 吉田進也

司 会：安藤恭子

ここ3年間、研究コンサートでは電子キーボードとアコースティック楽器によるハイブリッド・オーケストラによる試みが取り上げられたが、それらの演奏形態は次のようになっている。

第5回大会（文教大学）では一段電子キーボード7台がオーケストラスコアの弦楽器パートを担当し、管打楽器パートは生の管打楽器が担当。第6回大会（昭和音楽大学）では同じスタイルで、弦楽器パートを一段電子キーボードでなく電子オルガン4台が担当した。すなわち両方とも電子楽器が弦楽器の代用として用いられた。これに対して、今大会では管打楽器の奏者が6名ということもあって、電子キーボードが弦楽器という枠に捉われないで広く多様に用いられていたのが特徴であり、これは前2回とは異なるハイブリッド・オーケストラのタイプを提示したといえよう。

また、一段電子キーボードの機種もヤマハ：ミュージック・シンセサイザー MM6、ローランド：シンセサイザーJUNO-D、電子チェンバロC-30、スズキ・ハモンド：低音オルガン・バスマスター EB-3000と4種類の電子キーボードを目的に沿って用いていたのがユニークな音の変化を得るのに資していた。

今回の演奏に関して、共演したモーツァルテウム音楽大学のロルフ・ブラッグ教授が、日本電子キーボード音楽学会らしい演奏スタイルに興味を示し、演奏効果に満足してその意義を認めたことにある。ソリストにとってはピアノ協奏曲を2回演奏するという強行軍であったが、最初の2台のピアノ、すなわち減衰音楽器によるピアノ協奏曲と電子キーボードという持続音の楽器による演奏での対比が聴けたことも意味深いものがあった。

特記したいことに、今回の2台のピアノのための“悲愴協奏曲”の演奏にあたり学生たちが第2ピアノを電子キーボードのために編曲して演奏したことが挙げられる。このような応用力のある学生たちが育って教職につけば、社会の変化に対応した魅力的な教育者が期待できると思われた。



チャイコフスキー：組曲「くるみ割り人形」よりあし笛の踊りを演奏中の学芸大 ハイブリッド・オーケストラ



リスト：悲愴協奏曲ホ短調 s. 258。 ピアノはロルフ・ブラッグ教授

懇親会のスナップより



上および左下写真：中国からの参加者（写真上左端は宮本賢二朗会員）



通訳を務めた永田瑞木さん（写真左）



研究コンサートの演奏者の方々

事務局からのお知らせ

1. 学会誌 Vol.7 投稿者募集

学会誌『電子キーボード音楽研究』Vol.7 への投稿者を募集しています。実践記録やレポートなど、幅広い意見を載せていきます。様々なお立場で電子キーボードと関わる皆様の声を反映させて、当学会らしい実践に裏打ちされた多様な思考が交錯する誌面となりますよう、皆様のご応募をお待ち申し上げております。5月の連休明けが締め切りです。詳細はホームページの学会誌投稿規程をご参照の上、事務局までお問い合わせ下さい。

原稿の種別および字数：電子キーボードを用いた音楽の演奏、創作、教育等に関する①研究論文（20,000字以内）、②研究報告：部会、分科会等含む（10,000字以内）、③会員の活動報告：演奏、創作、社会、教育、他学会参加等（5,000字以内）、④その他：提言、書評、演奏会評、紹介等々（5,000字）。

投稿者：原則として会員とする。ただし依頼原稿執筆者はこの限りでない。

*ご執筆前に事務局に書式見本（テンプレート）をご請求下さい。見本に上書きする形でご執筆頂けますと、編集の折、大変助かります。お手数ですが、どうぞよろしくご協力をお願い致します。

2. 学会メール情報

会員情報などをメールでお知らせをしています。メールアドレスを登録していない方、また今まで会員情報などを受け取っていない方は事務局へご一方ください。

3. 会員情報募集！

ホームページは昨年6月にアクセス数をカウントしはじめ、1月22日に訪問者が1500名になりました。ここで重要なのが情報交換としての「会員情報」です。コンサートだけでなく、出版やセミナーなども会員が関わっているものであれば結構です。とき、ところ、主催、曲目、演奏者、入場料、問合せ先などをお送りいただければ事務局で編集して掲載いたします。チラシを添付していただくと便利です。ホームページは「日本電子キーボード学会」で検索ができます。

《編集後記》

いうまでもなく、本学会のように電子キーボードという分野を対象とする他に類をみない学会では広く国際的情報交換が必要である。今まで、ドイツ、オーストリー、中国、台湾から参加者を迎えたが、今回は、オーストリア（モーツアルテウム音楽大学）、台湾（東海大学）に加え中国の星海音楽学院、北京現代音楽学院、西安音楽学院、四川音楽学院、ハルピン大学から総勢21名という多くの出席者があった。詳細はレポートをお読みいただくとして、日本では見聞することのできないすばらしい事例やダイナミックなエネルギー溢れる活動を知ることができた。同時に、電子楽器王国として日本のハード（楽器）に対応するソフト（音楽・教育）の今後のあり方を考えさせられるものでもあった。わが国としては、過去の経験にとらわれることなく新しい実績づくりが求められているのではないだろうか。（阿方）